

『宋人文集の編纂と伝承』

東英寿*編、内山精也**・浅見洋二***・萩原正樹****・中本大*****著、
中国書店、2018年

齋藤希史†

木版印刷の隆盛が、中国そして東アジアの知のありかたにとって大きな変革をもたらしたことは、すでに贅言する必要はないだろう。本書の冒頭におかれた東英寿氏による「序文 編纂と伝承のフィールドワーク」が宮崎市定の東洋ルネッサンス論に言及するように、それは西洋におけるゲーテンベルクの印刷術に比すべき（かつ先行する）ものとしてつとに指摘されていた。顧みれば宮崎の「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」の初出は1940年である。けれども宮崎の議論は印刷術を基本的には思想や文章を「普及する手段」（宮崎、1992:9頁）として位置づけるものであり、印刷術が思想や文章との間に果たしたさまざまな相互作用が重要な意味をもったことについては、なお注意が向けられていない。

本書は、近年のメディア論の知見もふまえ、「宋人文集」という視座を軸とすることで、この時代に知のありかたがどのように変わったのか、事例に即して実証的にとらえようとする。それによって、時代の変化が、図式としての変革論としてではなく、リアリティをともなった個々の事象の集積による多面的な変貌の複合体として立ち現れる。

本書は、「序文」に続いて「I 総説」、「II 編纂」、「III 伝承」の3部から構成され、東英寿、内山精也、浅見洋二、萩原正樹、中本大の各氏（執筆順）による計12本の論文を収める。「I 総説」は、全体を「詩集の自編と出版から見る、唐宋時代における詩人意識の変遷」と題して、内山氏による「メディア変革と詩集自編の普遍化 初唐から北宋末まで」「南宋中期の出版業隆盛がもたらした新たな展開 宋代士大夫の詩人認識とその変質」「南宋後期における詩人と編者、書肆 江湖小集刊行の意味すること」の3本の論文からなり、「II 編纂」は、「言論統制下の文学テキスト 蘇軾の創作活動に即して」（浅見氏）、「『和晏叔原小山樂府』をめぐって」（萩原氏）、「周必大の『歐陽文忠公集』編纂について」「范仲淹の神道碑銘をめぐる周必大と朱熹の論争 歐陽脩新発見書簡に着目して」（いずれも東氏）、「『聯珠詩格』は『新選集』の典拠か 『連集良材』所収、戴復古「子陵釣臺」

* 九州大学大学院比較社会文化研究院教授

** 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

*** 大阪大学大学院文学研究科教授

**** 立命館大学文学部教授

***** 立命館大学文学部教授

† 東京大学大学院人文社会系研究科教授

saitomar@l.u-tokyo.ac.jp

詩を端緒に」（中本氏）の5本の論文、「III 伝承」は、「歐陽脩『近体楽府』の成立とその伝承 もう一つの『近体楽府』（東氏）、「鶴に乗る「費長房」本邦における漢畫系畫題受容の一側面」「十雪詩」のゆくえ」（いずれも中本氏）、「詞譜」の誕生と発展」（萩原氏）の4本の論文からなる。

5名の執筆者は、東氏を代表として2014年度から2017年度まで日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）によって行われた共同研究「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」のメンバーであり、本書はその成果として編まれたものである。しかし型通りの科研報告論文集ではない。その特徴を示すものとしてまず挙げるべきは、内山氏の3本の論文による「総説」であろう。氏は、「文集」のうちでも「詩集」の「自編」、そしてその刊行という流れに着目して詩集編纂の様態を検証し、さらに「詩人」という存在に対する認識の変化にも注意することで、時代の大きな変化を示そうとする。内山氏は唐から宋までを3つの時期、すなわち「自編という行為が少しずつ一般化した」唐初から北宋中期までの第1期、書籍の流通が写本のみであった時代から版本も並存する時代への変化がメディア環境には見られるものの、詩集の生前刊行については定着するにはいたらなかった北宋後期から南宋初期までの第2期、そして「士大夫自らが率先して自撰詩集を生前に刊行し、「布衣の詩人までもが次々と生前に自撰詩集を刊行するようになった」12世紀後半から宋朝滅亡までの第3期に区分する（76-77頁）。さらに氏はこの変化が「メディア環境の変化を後追いする形で進行した」とし、「同時代の情報を、印刷によって傳播させることが日に日に浸透してゆき、やがて同時代文学もその対象となり、それがとうとう文化的に保守的な士大夫の意識をも変えた」と指摘する。印刷術の隆盛をもって西洋のルネッサンスと比較する段階を遠く超えて、中国の伝統文化を担ってきた士大夫の意識と印刷環境との相互作用に意味を見出すのである。内山氏の論考は、唐初から南宋までを広く見わたすという意味で「総説」として置かれる理由にはなるが、同時に、えられた視点の明確さが本書全体の背骨として機能している点で、「総説」にふさわしいと言えよう。さらに「布衣詩人」という新たな知識階層が印刷環境の拡大によって生まれたという指摘は、こうした中間知識階層の拡大が宋元から明清へといたる中国近世の文学を支えたことを考えれば、本書の射程を示すものとしても重要である。

「II 編纂」に収められた論考は、個別の「文集」に即して、それぞれの課題を掘り下げていく。執筆者それぞれに独自の研究方法があり、対象の分析における重点の置き方も異なるが、読み進めていくと、そこには共有される認識があることに気づく。

それは、「文集」があたかも生命体のように動的な存在であることを前提として、その生成と持続を可能にする圏域が存在することへの意識である。浅見氏は、書かれたものが失われやすく脆弱なものであることをふまえ、「かかる文学テキストに社会的なポジション（居場所）を与え、後世へと受け継いでゆく器が、ほかならぬ文集であった」（88頁）と規定した上で、蘇軾においては「私的な空間に属するテキストと皇帝を頂点とする権力システムが作動する公的な言論空間との関係性」（154頁）がとりわけ特徴的であることに着目して「文集」の位置を探り、東氏は周必大による『歐陽文忠公集』編纂の実態を詳細に明らかにしつつ、またその過程でどのような操作が行なわれたか、周必大と朱熹との論争から光をあて、論争自体の意義も新たに示す。一つの「文集」の出現がさまざまな条件が組み合わさった結果の産物であることが具体的な検証を経て了解されると同時に、その検証を進める中で、テキストの交換と取捨、そしてそれを「文集」として形にすることが行なわれる複数の圏域の存在とそれぞれの性格が浮かび上がってくる。いわば書写と印刷の環境を背景に形成された「文集」の複雑な生態系を明らかにする試みである。

「文集」として形を得た後でも、例えば東氏が『歐陽文忠公集』百五十三巻が刊行されたことによって、それ以前に刊行されていた様々な歐陽脩の全集は駆逐され(223頁)たと指摘するように、姿を消してしまう場合も多い。萩原氏が復元を試みた詞の次韻集『和晏叔原小山樂府』はその例でもある。氏の作業はこの書物が晏幾道の詞に次韻をした詞の「文集」であることを手がかりとするものであるが、それゆえ必然的に次韻という営為の意味を問うことになり、この「文集」が「何故南宋末期に編集・刊行された」(187頁)のかを問うことになる。言い換えれば、晏幾道詞に次韻する圏域がどのように成り立ち、どのような性格をもつのが、『和晏叔原小山樂府』の復元によって考察されるのである。これは類書に記された出典を手がかりに行われる輯佚とは手法を異にし、書物を成り立たせる原理とその圏域の存在を明らかにしようとする研究である。

七言絶句の典拠を足場として組み立てられた中本氏の論考は、「文集」のうちでも特に集散がはげしいアンソロジー相互の関係を定位するための手法の実践報告として興味深い。室町末期の連歌寄合書『連集良材』に載録された戴復古の七絶が元代の作詩書『精選唐宋千家聯珠詩格』と室町期に編まれた『錦繡段』に同文が見られることを発端に、『錦繡段』がもついた室町期成立の『新選分類集諸家詩』も含めて、氏は五山文学という圏域において詩の総集がどのように編まれたのかを見きわめる。論文のタイトルは典拠論に見えるが、射程はその範疇に収まらない。また、五山文学研究においては堀川貴司氏による「文集」の書誌調査が丹念に行なわれているが(堀川, 2017)、中本氏の論考はそうした成果をふまえた上で、「宋人文集」の生態系の拡がりに五山文学の「文集」の動態を接続するのである。『聯珠詩格』は中国では失われたとされるが、こうした作詩書の圏域と中間知識階層との関係、作詩書が伝えられた日本においてそれが構成した圏域の性格など、ここから起こされる問いも尽きない。

こうした問題意識から見ると、「Ⅱ 編纂」と「Ⅲ 伝承」は、「どちらに収録すべきか迷う論考もある」(10頁)と「序文」に記されるように、論述の重点の置き方にやや違いがあるだけで、基本的な視角に変わりはなく、むしろ、執筆者それぞれの分析方法が「編纂」と「伝承」で一貫していることのほうが、そして個々に固有の手法であることが、よい意味で際立っているように思われる。そもそも「文集」を動態として捉える以上、「編纂」と「伝承」は一連のものである。実際、東氏の論文は、歐陽脩『近体樂府』の「伝承」の過程を明らかにすることで、その成立の状況へとさかのぼって検討するものであり、萩原氏もまた、音楽をとまなうテキストとしての詞が「詞譜」という形態にどのように「編纂」され、なかでも清代に編まれた『詞律』が起点となってどのような展開を生むのかを描き出す。さらに中本氏は、空を飛び鶴に乗る日本の「費長房」が中国には見られないことを絵画表象の伝来を視界に収めて論じるが、その「費長房」イメージの成立について、「そこには数多くの類似する圖像を前にした畫人や作家の困惑が読み取れる一方、類似するものの共通項を見出し、それを相互に関連付けながら新たな世界観に導こうとする進取の姿勢が看取できる」(295頁)と述べるように、まさにそこでは「編纂」が行なわれていたのである。それはまた、元代の総集『皇元風雅』所載の「十雪題詠」の日本における「伝承」においても、それぞれの享受の圏域における再生産としての「編纂」がなされていたことを想起させる。

以上、不十分ながら本書の内容を駆け足で見わたしつつ思うのは、書名は一見すると書誌学的であり、全体の問題意識はメディア論的でありながら、ここには、文学研究はいかになされるのかという問いに対する答えとしての実践(「序文」に言う「フィールドワーク」)が、執筆者それぞれの手法を駆使して、着実に行われているということである。人が何かを書き記して交換し、集めて整

えて伝えるという営為において何が生じているのかを探究するという本書のアプローチは、古い言い方かもしれないが文学とは何かという問い、言い換えれば、私たちは「文学」をどのように再定義しうるかという問いを誘発する。その答えは先験的に用意されているわけではなく、本書に示されたそれぞれの研究が対象とすることによって認識可能となるようなものであろう。手法によって対象が浮かび上がる。

そうだとすれば、それぞれの手法を相互に検討して位置づける試みもまた、なされてよいのかもしれない。本書の豊かさは、執筆者それぞれの学識に依ることは言うまでもないが、それを次代の研究につなげていくためには、そうした機会が供されることも有意義ではないだろうか。希望として最後に付け加えたい。

参考文献

堀川貴司（2017）「五山文学における總集と別集——編成を中心に」『日本中國學會報』第69集。
宮崎市定著、佐伯富ほか編纂委員（1992）『宮崎市定全集19 東西交渉』岩波書店。